
サヨナラホームラン

咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サヨナラホームラン

【Nコード】

N3929Y

【作者名】

咲夜

【あらすじ】

主人公の清原大翔は毎日学校に行ってもいじめられ、孤独な毎日をおすごしていた。もう学校に行くことさえ嫌になっていたある日、野球を始めた。

きっかけは、幼なじみの斉藤杏里と球場にプロ野球の試合を見に行ったときにことだった。

そして大翔は、地元の草野球のチーム「ドリームズ」の仲間たちな出会い、成長していく。

野球と主人公の恋を題材にしたベースボールラブコメです（^^）
よろしく願いします！

プロローグ

僕は清原大翔。高校2年。帰宅部。趣味、特になし。

毎日学校に行ってもいじめれ、孤独な毎日を過ごしていた。もう学校に行くことさえ嫌になっていた僕はある日、野球を始めた。

きっかけは、幼なじみの斉藤杏里と球場にプロ野球の試合を見に行ったときにことだった。最初は全く興味がなかった。むしろ、早く終わって欲しかった。

しかし、9回の裏、2アウト満塁。

起死回生のチャンスで放った、逆転満塁ホームラン。僕は目を奪われた。

奇跡の一発。綺麗な弾道。野球って、つまらないスポーツだと思っただけど、こんなに感動するんだ…。

そんな僕に隣で興奮気味の杏里が、「大翔、野球やりなよ！大丈夫！うちが応援するから！ホームラン打ってみせてよ。」
と言われた。こんなかわいい顔で言われちゃあやらないわけにはいかないだろう。

僕の一步は杏里のこの一言がきっかけだった…。」

帰り道の決心。

杏里と僕は球場帰りの電車に乗る。球場からすぐに出たのにも関わらず、満員電車…。

（まあしょうがないか…。）と思い、窓から空を見上げる。

杏里にああ言われたけど、野球なんていままでやったことはない。杏里は都内の進学校でバドミントンをやってる。スポーツ万能で周囲からも一目置かれてる。というところだろうか。昔からそうだったからな。

あいつとは幼稚園以来の腐れ縁でいまでも交友がある数少ない友人の1人である。

それにしてもあのホームランはすごかった。なんていうんだろうか、まだ興奮が残ってる。

「野球やる気になった？」

ふいに杏里が聞いてきた。

「いや、だつて素人だよ？それに道具もないしき。あのホームランには感動したけど無理じゃない？」

「うちが考えなしにあんなこと言うと思う？」とニヤリと笑った。

「どんな考えだよ」

「大翔には草野球チームチームに入ってもらいます」

「マジかよ…。」

まさかそこまで考えてたとは。杏里にしては珍しいな…。

「板橋ドリームスっていう高校生チームなんだけどさ、まだ試合で1回も勝ったことない弱小チームらしいのよ。そこなら大翔でもやっていけるでしょ？」

キラキラした顔で言ってるし…。かわいい。まあそんなことはどうでもいいけど、行くだけ行ってみるかな。

「確かにそれならできそうかも。暇だから今度の日曜日行ってみるか」

「うちも付き合っね！」

と言って、僕たちは電車から降りた。

杏里と別れた帰り道。僕は考えた。僕なりの決心。

(挑戦してみよう…。)

素人でも多少のルールなら知ってるし、父親ともキャッチボールしたことはあるのでグローブはある。

バットはないけど、まあそこはなんとかなるだろう。

野球を通して、このつまらない日常に終止符を打てるかもしれない。

だからこそその決心。

「ただいま」

家に着いた。でもすぐにジャージに着替えて外にでる。

「ちよつとランニングしてくるか…。」

屈伸運動をしてから走り出す。

これが僕の第1歩だった。

板橋ドリームス

朝、目覚める。

今日は日曜日。杏里と野球に行く日か…。

集合時間は午後2時。枕元の時計は昼の12時を示していた。

(ちよいねすぎたかな?)

すぐにジャージに着替え、身支度を済ます。(昼飯食うか。)

僕の父親と母親は僕が中学3年生のときに交通事故で死んだ。

だから今は1人暮らし。最初は寂しかったけど、もう慣れたかな。

学費とかは親戚のおばさんが払ってくれてる。おばさんに一緒に暮らそうと言われたけど、この家を離れたくなかった。

お母さんとお父さんの家を…。

カップ麺を食べ終わってグローブとミットを持って家を出る。

杏里と待ち合わせ場所の駅前までチャリ、で向かう。

駅前まではチャリで五分くらいで着いた。ギリギリだったから結構飛ばしちゃったな。

「よー。」

杏里が挨拶してくる。

「で、その練習場まで何分かかるの?」

「うーん。15分くらいかな?」

案外近いんだな。

「じゃあいくか!道案内よろしく」

僕たちは練習場に向かう。

やがて練習場に着いた。そこはでっかい公園内の球場で、結構でかった。

すると1人のユニホーム姿の男が近づいてくる。

「君が清原大翔くんだね？板橋ドリームズのキャプテンの大貫 宏です！よろしくね」

「あつ。よろしくお願ひします。」
と言つて握手する。

大貫は眼鏡を掛けていて背は170センチくらいだろうか。案外大きい。

「杏里ちゃんもこんにちは！今日はよろしくね」

杏里とは知り合いらしい。けしからんやつめ…。

「清原くんには空きポジションになつてたキャッチャーを守つてもらおうかな」

「え、しよっぱなすか…。」

まあとりあえず練習に参加することにした。

最初はキャッチボールから。

キャッチャーということだからキャッチボール相手はピッチャーになつた。

「エースの高橋亮です！よろしくお願ひします」

と挨拶してくる。背は180くらいあるだろうか。かなりの長身だ。

「ああ。よろしく」と返事をする。

早速キャッチボールする。最初は弱い山なりの球で肩を慣らしていったのだが、だんだん高橋の球がはやくなってくる。

バシーン？

ミットに勢いよくボールが入る。

え、少し速すぎじゃないすか？多分130キロは出てますよ？…。

「ちよ、ちよ、タンマ…。」

僕はキャッチボールを止めて高橋を呼ぶ。

「速すぎるからすこし緩くしてくれないかな？僕素人だからさ」

と、言う。まあ素人にあんな球をとるのはまず不可能だろう。……
何球か捕つただけさ。

「あ、すいません。キャッチャー志望つてきいたんで、つい経験者かと思つたから…」

「いや大丈夫だよ。緩くお願いね。」

高橋にボールを返す。

確かに好んでこのボールを捕ろうとは思わないわな。

練習も中盤に入り、実践形式のバッティング練習に入る。

ピッチャーは高橋。キャッチャーは僕。ショートには大貫がいた。

杏里はベンチに座って応援してる。

初めてつけるキャッチャーの防具は思ったより重かった。まあ当然だよな。

キャッチャーは怖いけど、ブルペンで受けて結構たのしくなってきた。案外自分に合つてたのかもしれない。

緊張感の中バッターが打席に入る。

さつき、大貫が「彼の悩みを解決してくれ！」とか言つてたけど、なんなのだろうか。そんなことをかんがえながらサインを送る。

うなずいた。もちろん初球はストレート。

そして第1球を少しダイナミックなフォームから投げた！！

ボン！？

………
デットボール。

次の打者もその次もデットボールとフォアボールで3連続四死球。コイツ中々やるな…。

（ん？大貫が言つてた悩みつてこのことなのか）

豪速球を投げるピッチャーはコントロールが悪い。漫画の世界ではよくある話だが、本当にあるとはね。

（このままじゃバッティング練習にならないしな…。）

僕はマウンドの高橋のもとに向かう。

「素人が言うのもなんだけどさ、もうちょっと深呼吸して投げて

みたらどうかな？ テンポもはやい気がするし、ミットめがけて思いっきり投げてみてよっ！」

「わかりました！」

そう言っつて高橋は球を受け取る。

結構気合が入ったらしい。高橋の目つきが変わった。

そして気を取り直して、高橋がセットポジションから投げる？

バシーン！

ミットがものすごい音を立てた。自分でもびっくりしてる。ものすごく速い。

「それもストライクだよ…。」ミットが全く動かなかった…。見渡してみるとみんな驚いてる。マジかよ。

杏里がスピードガンを持って後ろのベンチに座っていた。

「何キロ出た？」

杏里はあんぐりーというばかりの顔をしていた。

「ひゃ、142キロ…。」

もはやプロやねん。なんなんこのスピードは。

その後も豪速球が続き、バッターは3球三振。次も、その次も三振で9球で3アウトを取った。

「すごいよ高橋！ 制球難を克服したじゃないか！…」と、マウンドに 大貫や、守ってた人達が集まって喜んでいた。

ついには高橋は胴上げをされていた…。

(チームワークいいなあ)

と思いながら僕はみつめていた。

ここが僕の居場所なのかもしれない。そう思った。ミスしてもドンマイドンマイ！と温めてくれる。いいチームだ。

やがて高橋が、

「ありがとうございます！清原さん！コントロールが直りました！」

「いやいや、僕はたいしてなにもしてないよ？自分で克服したんだから自信持っていていいんじゃない？」

と言ったら、はい！と言ってマウンドに戻っていった。

練習も終わり、帰り道。

「やってよかったでしょ？」

と杏里が笑顔で話しかけてくる。

「ああ。いいチームだったね。」

とだけ言っただけを向いて歩く。

このチームだったらできるかもしれない。ホームラン打てるかもしれない。そう思った。

だからこそ杏里のためにも…。

そう思った。

明日から学校だ…。行きたくない。でも僕は次の日曜日が楽しみで仕方なかったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3929y/>

サヨナラホームラン

2011年11月24日00時48分発行